

明解 更級日記

東京教育大学教授

山岸徳平 著



東京

新塔社

著者略歴

明治二十七年新潟県に生まれ、大正十三年東大国文学科を卒業。東京女高師訓導、学習院講師、同教授、東京文理科大助教授兼東京高師教授、東京文理科大教授兼東京高師教授、東京文理科大教授兼東京高師教授を経て、東京教育大、東京文理科大教授就任、実践女子大教授、学習院大講師をして知られる。著書は「校註枕草子」「河内本源氏物語研究序説」「日本文化と懐風藻」「堤中納言物語評解」そのも多数あり。

現住所 東京都 島区高田

本町 一五一〇

日記 級更 解明

驗書 受叢 習文 学国

昭和三十年三月五日 初版発行
昭和四十年二月十日 重版発行

定価 二五〇円



著者 山 岸 徳

東京都新宿区戸塚町一ノ三一五番地

発行者 土 屋 寛

東京都千代田区飯田町一ノ一八番地

印刷所 日月印刷株式会社

発行所

東京都新宿区戸塚町一丁目三一五番地

新 塔 社

電話東京三四一局二〇番
振替東京 一一九三九六番

目次

	目	次
解説	一
年表	四
更級日記の語法	八
本文	三三
一、あづま路の道のはてよりも	三三
二、門出したる所は	三七
三、十七日のつとめてたつ	四〇
四、そのつとめてそこをたちて	四三
五、今は武蔵の国になりぬ	四七
六、野山、あし・をぎの中を	五五
七、西富といふ所の山	五八
八、もろこしが原といふ所も	五九
九、足柄山といふは	五九
一〇、これよりは駿河なり	六三
<hr/>		
一一、清見が関は	六四
一二、富士川といふは	六六
一三、ぬましりといふ所もすがすがと過ぎて	六九
一四、それよりかみは、猪鼻といふ坂の	七一
一五、尾張の国、鳴海の浦を過ぐるに	七四
一六、美濃の国になる境に	七六
一七、みつさかの山のふもとに	七七
一八、栗津にとゞまりて	七八
一九、広々と荒れたる所の	八〇
二〇、まゝ母なりし人は	八三
二一、その春、世の中いみじう騒がしうて	八六
二二、また、聞けば、侍従の大納言の	八八
二三、かくのみ思ひくんじたるを	九〇
二四、五月ついたちごろ	九七

二五、足柄といひし山のふもとに……………	一九	四三、あづまより人來たり……………	二五
二六、物語の事を、昼はひぐらし思ひ続け……………	一九	四四、かうてつれづれとながむるに……………	二五
二七、春ごとに、この一品の宮を……………	二〇	四五、母、一尺の鏡を鑄させて……………	二五
二八、花の咲き散るをりごとと……………	二〇	四六、親族なる人、尼になりて、修学院に……………	二六
二九、世の中に、長恨歌といふふみを……………	二〇	四七、あづまに下りし親、からうじて上りて……………	二六
三〇、その十三日の夜、月いみじくまなく……………	二〇	四八、東は野のはるばるとあるに……………	二六
三一、そのかへる年、四月の夜中ばかりに……………	二二	四九、十月になりて京に移ろふ……………	二六
三二、その五月のついたちに、姉なる人……………	二四	五〇、十二月になりて、また参る……………	二七
三三、雪の日を経て降るころ……………	二三	五一、十日ばかりありてまでたれば……………	二七
三四、かへる年、むつきの司召に……………	二三	五二、ひじりなどすら、さきの世のこと夢に……………	二七
三五、四月つごもりがた……………	二三	五三、十二月二十五日、宮の御仏名に……………	二七
三六、旅なる所に来て、月のころ……………	二四	五四、かう立ち出でぬとならば……………	二七
三七、まゝ母なりし人、くだりし国の名を……………	二五	五五、その後は何となく紛らはしきに……………	二九
三八、かやうに、そこはかなき事を……………	二五	五六、またの夜も、月のいと明かきに……………	二九
三九、親、となりば、いみじうやむごとなく……………	二六	五七、冬になりて、月なく、雪も降らずながら……………	二九
四〇、七月十三日二下る……………	二七	五八、上達部・殿上人などに対面する人は……………	二九
四一、八月ばかりに太秦にこもるに……………	二七	五九、今は、昔のよしなし心も……………	二九
四二、冬になりて、ひぐらし雨降り暮いたる夜……………	二九	六〇、そのかへる年の十月二十五日……………	二九

六一、夜深く出でしかば、人々困じて……………	二五
六二、つとめてそこをたちて、東大寺に……………	三八
六三、曉、夜深く出でて……………	三〇
六四、二三年、四五年隔てたる事を……………	三三
六五、二年ばかりありて、また石山に……………	三三
六六、また初瀬に詣つれば……………	三四
六七、何事も心にはぬ事もなきまゝに……………	三六
六八、いにしへ、いみじう語らひ……………	三八
六九、三月のついたちごろに、西山の奥なる……………	三九
七〇、世の中むつかしうおぼゆるころ……………	三〇
七一、うらうらとのどかなる宮にて……………	三〇
七二、同じ心にかやうに言ひかはし……………	三三
七三、さるべきやうありて、秋ごろ和泉に……………	三三
七四、世の中に、とにかくに心のみ尽すに……………	三六
七五、二十七日に下るに、男なるは添ひて……………	三六
七六、九月二十五日より煩ひ出でて……………	三四
七七、昔よりよしな物語・歌の事をのみ……………	四五
七八、甥どもなど、所にて朝夕見るに……………	四八

七九、ねむごろに語らふ人の……………	五〇
八〇、年月は過ぎ變りゆけど……………	五一

附 録

更級日記から 出題された 最近入試問題並解答……………	五三
索引……………	五〇

解 説

一、作者 更級日記は、菅原孝標女すがはらのたかすけのむすめによって書かれた。その家系（四ページ参照）を見ると、菅原氏は代々、大学頭・文章博士ぶんしょうはくしに任じられた学問の家で、作者の父孝標は、道真五世の孫である。孝標は平凡な受領として終ったが、作者の兄定義さだぎは、大学頭・文章博士となり、死後、北野神社の和泉殿に祭られている。母は歌人藤原倫寧とよなる女で、「蜻蛉日記」の作者たる女流歌人右大将道綱母の妹、その兄（作者の伯父）長能も、勅選集に五十数首を数えられる有名な歌人である。また、作者が幼時を共に過ごした継母の上総大輔かみすけは後一条帝の時の女房で歌人である。

作者は一条天皇の寛弘五年（一〇〇八）に生まれた。寛弘五年は「源氏物語」が巻を追って書かれていた時代で、こうした家庭と時代環境の中に育った作者は、きわめて夢見がちな文学少女として成長した。十歳の時、孝標の上総介任官に伴い、継母や姉と任地に下ったが、それ以後の作者の一生は、この日記によって、ほとと知られる。すなわち、作者は十三の時上京して、あこがれの物語の世界に、夢多き少女時代を過ごし、継母との生別、乳母や姉などとの死別によって、次第に内面的な安住の地を夢見るようになった。後、祐子内親王に宮仕えし、橘俊通たちばな の としゆみと結婚して家庭生活に入るが、このころから現実と夢想のくい違いに目ざめて、安住の地を宗教に求めようとしたようだ。天喜五年（一〇五七）俊通が信濃守に任じられ、翌年十月にこの世を去ってからは、阿弥陀来迎の夢を唯一の頼みとして寂しい老後を送るのである。その没年は明らかでない。

なお「夜半の寢覚」、「浜松中納言物語」もこの人の作とされ、御物本の、定家の奥書によれば、「みづからくゆる」、「あさくら」などという散佚物語の作もあった。

二、書名 は「さらしなのき」と呼ばれた。これは、この日記の巻末の方に、俊通の死後、甥が訪れた時、月も出ででやみにくれたるをばすてに何とてこよひ尋ね来つらむ

と作者がよんでいるが、それによってその老後の境遇を「をばすて」と観じ、かつ俊通の任国信濃の縁で、「をばすて日記」ともいふべきを「さらしなの日記」といったのであろうかと思う。

三、内容 作者が、夫の死後、ほど五十三、四歳のころに、過去四十年間を追想して執筆したものである。作者は、後一条天皇の寛仁年間に、父に伴われて上総に下った。その頃から、継母や姉たちが、光源氏の物語などを語るのを聞き、等身の薬師仏を作つて「物語のある限りを見せ給へ」と祈つた事から書き起した。その後十三の年に上京し、物語を読みふけた少女時代を経て、宮仕え、結婚と現実が目ざめゆく過程と、康平元年（一〇五八）五十一歳で夫と死別後、来世の安楽を夢みつゝ寂しい老後を送るに至る一生を、年次を追つて記した。それはほとつ次の四つに区分できる。

一、上総から上京する紀行（一段—一八段）

二、宮仕えまでの家庭生活（一九段—四八段）継母との別れ。乳母や侍従大納言女の死。物語の耽読。猫の出現。治安三年の火事。姉の死。東山移居。父の任官。太秦・清水参籠。清水寺に鏡奉納。父の上京。

三、宮仕え（四九段—五八段）

四、家庭生活（五九段以後）石山参籠と初瀬詣で。鞍馬参籠。和泉の旅。夫の任官。夫の死。

「更級日記」は、右のように第一に、紀行文学的な色彩がかなり強い。元來、紀行も日記も、自照文学として同一の傾向にある。紀行文学としてすぐれた作品には、「更級日記」以前に「土佐日記」があり、以後に「十六夜日記」がある。第二に、この作品に八十八首の和歌の載せられていることだ。その点この日記は、孝標女の家集といえないこともない。これも平安時代の他の日記文学が多少家集的色彩を有する点を考えると、この日記独特のものではない。「更級日記」の本質的な特色は、夢や幻想の記事の多い事である。作者はきわめて夢幻的・浪漫的な精神の持主で、夢と現実の境に生をさまよつた人であるが、日記には現実を夢幻の世界に高めようとする意識が底に流れている。この日記を、満たされざる夢を追つて生を彷徨した、一個の女性の魂の発展史としてたどる時、そこに時代を超越した文学的生命を痛感するのである。

四、諸本と錯簡 この日記の現存伝本は、すべて藤原定家筆の御物本系統のものである。写本には 1、宮内省圖書寮本（御物本の模写）2、松井簡治博士蔵本 3、彰考館本 4、斎藤彦磨旧蔵本 5、伴直方旧蔵本 6、佐々木信綱博士蔵本等があり、板本には 1、扶桑拾葉集本 2、群書類従本 3、西門蘭溪校本等がある。ところで、この日記には、古来七箇所の錯簡（綴じ誤り）があり、これらの本はその錯簡のまゝに伝えられた。大正十二年八月、玉井幸助博士が、佐々木信綱博士と共に、御物本を調査され、その錯簡を発見し、正しい姿に還元された事は、この日記の研究史上には注目すべきものである。

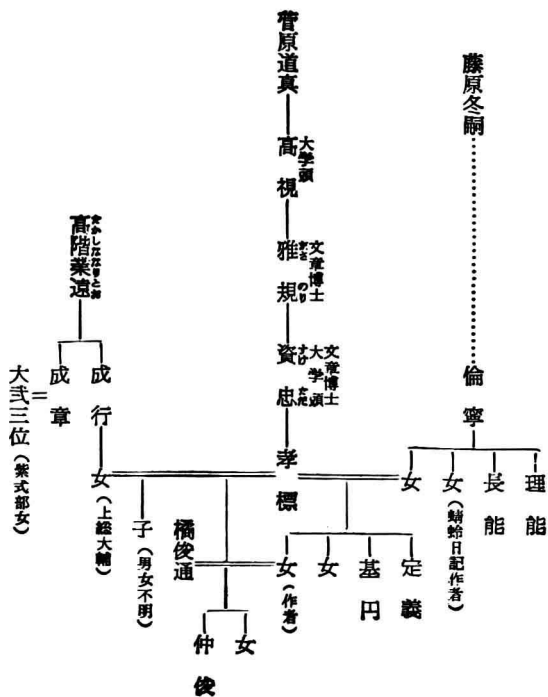
五、註釈書 註釈書には次のようなものがある。

高橋	佐成	宮田	玉井
宏典	謙太郎	和一郎	幸助
			更級
			日記
			新註
			更級
			日記
			評釈
			更級
			日記
			新解
			更級
			日記
			通解

野 曾 玉 片 今
 村 尾 井 山 泉
 嗣 芳 沢 山 邦 忠
 男 之 太 助 夫 義

野	曾	玉	片	今
村	尾	井	山	泉
嗣	芳	沢	山	邦
男	之	太	助	忠
				義
				更級
				日記
				新註
				更級
				日記
				評釈
				更級
				日記
				新解
				更級
				日記
				通解

作 者 系 図



更級日記年表

天皇	年次	月日	作者 年齢	記事ならびに 関係事項
一条	寛弘五 (1008)	正月二十四日	一〇	孝標上総介に任せらる。
後一条	長和六 (1017)	九月三日	一三	上京の門出。
	寛仁四	十二月二日	一四	着京。三条の宮の西なる家に入る。 継母と別る。 乳母死す。
	治安元 (1011)	三月一日	一五	大納言行成卿の姫君病没。 太秦参籠・源氏物語を耽読す。 土忌で他に滞在。
	治安二	三月十九日	一六	をかしげなる猫を飼う。姉病む。 長恨歌の物語を借りにやる。
	治安三	七月七日	一七	家焼失。猫も焼死。移転。
	万寿元 (1014)	五月一日	一八	姉、子を産みて死す。 司召の事あり。父任官せず。 東山に移る。
	万寿二	四月		京に帰る。
		八月二十六日		月末にまた東山に行く。
		十月		

		天皇		年次		月日		作者 年齢		記事ならびに 関係事項
	後朱雀	長元五	十一月二十日	二五	源資通齋宮着裳の勅使。 孝標常陸介に任ず。 孝標赴任。	長元八ごろ	八月十三日	二九	太秦参籠。 彼岸のころ母と清水に参籠。 一尺の鏡を初瀬に奉納。 秋、父帰京して西山に落ち着く。 京に帰る。母出家。	
		長元九	十月七日	三〇	関白頼通女嬬子入内。(二九日女御、三月一日中宮。)	長曆元	正月七日	三一	祐子内親王御誕生。	
		長曆二	四月二十一日	三二	媒子内親王御誕生。	長曆三	八月十九日	三二	中宮嬬子崩す。	
			八月二十八日		祐子内親王に宮仕えす。				宮の御仏名。	
		長久元	十二月二十五日	三三	橘俊通との結婚はこの年か。	長久二	正月二十五日	三四	俊通下野守に任せらる。	
		長久三	四月十三日	三五	宮の御供にて参内。内侍所拜謁。	長久四	十月十三日	三六	高倉殿に源資通と春秋の優劣を語る。 宮の御供にて参内。資通と再会す。	
		長久四	八月初旬							

寛徳元 (一〇四四)	九月十九日	三七	資通藏人頭となる。
寛徳二 (一〇四五)	十一月二十余日	三八	資通参議兼任。
永承元 (一〇四六)	十月二十五日	三九	石山にこもる。
永承二か			大嘗会御禊。この日初瀬参籠。
永承三か			春、鞍馬にこもる。十月、再び鞍馬にこもる。
永承四か	三 月		再び石山にこもる。
永承六か			秋、再び初瀬にこもる。
天喜三 (一〇五五)	十月十三日	四八	上旬西山の奥なる所に行く。
天喜五	七 月	五〇	再び太秦参籠。
	八月十余日		秋、和泉に下る。冬、帰京す。
	八月二十七日		阿弥陀如来来迎の夢を見る。
康平元	四 月	五一	俊通信濃守に任せらる。
	九月二十五日		娘の家に門出す。
	十月五日		俊通、仲俊を伴い赴任す。
	十月二十三日		俊通上京。
康平二、三 ごろ			俊通発病。
			俊通死去す。
			葬送。
			久しう訪れぬ人に歌をやる。

更級日記の語法

古典を正しく理解するには、文語法を一通り心得ていなければならぬ。文語と口語の違いは主として、歴史的仮名遣いと表音仮名遣い、用言の活用、助動詞と助詞などにある。特に、古文の複雑なニュアンスは助動詞や助詞の機能によって生じるといってよい。用言の活用を熟知することも大切であるが、紙面の都合で、助動詞・助詞に重点をおいて、更級日記の語法の大体と要点とを記しておく。なお、文例の括弧内の数字は、本書の段落を示すものである。

○助動詞

助動詞は活用する語についてさまざまの意味を添えるものであるが、どんな語につくか、どのような活用形につくかが決まっているから、接続の上から分類し、その上でそれらの機能を述べる方が学習に便利であろう。文法の助動詞を接続の上から分類すると次のようになる。

- 1 未然形に接続するもの す・さす・しむ・る・らる・ず・む・まし・じ・まほし
- 2 連用形に接続するもの きけり つぬ たり たし けむ
- 3 終止形に接続するもの べし まじ らむ めり らし なり (伝聞・推定)
- 4 已然形に接続するもの り
- 5 体言や助詞にも接続するもの なり ごとし
- 6 体言に接続するもの たり

未然形に接続する助動詞

一、す・さす

① ひき布を千むら、万むら織らせ、さらさせけるが家の跡とて……(三)

② そのほどは精進せさす。(四五)

③ 宮にその国を預け奉らせ給ふよしの……(五)

「す・さす」は、使役の意味を表わす助動詞で、口語の「せる・させる」にあたる。また③の例のように尊敬の意を表わすにも用いる。「す」は四段・ナ変の動詞に、「さす」はそれ以外の動詞について、ともに下二段型に活用する。使役の助動詞には他に「しむ」があるが、更級日記には用いられていない。

二、る・らる

① このをのこ罪しれうぜられれば、われはいかであれと。(五)

② 南ははるかに野のかた見やらる。(二)

③ 悲しくて人知れずうち泣かれぬ。(一)

④ 「さいふやうあり。」とおほせられければ……(五)

「る・らる」は口語の「れる・られる」にあたり、①受身、②可能、「……できる」の意、③自発、「自然に……れる・られる」「……せずにいられない」の意、④尊敬、「……なさる」の意の意味を添える。「る」は四段・ナ変・ラ変の未然形に、「らる」はそれ以外の動詞の未然形に接続し、ともに下二段型に活用するが、可能・自発の意を表わすものには命令形がない。

三、ず

恐ろしくても寝られず。(三八)

をこなども添はねば……(四)

世に見えぬ様なり(一一)

あらしこそ吹き来ざりけれ(一四)

「ず」は口語の「ない」にあたる助動詞で、打消の意味を表わす。活用は「ず・ず・ぬ・ね」という特殊な活用をし、その連用形に「あり」が結合して「ざら・ざり・ざる・ざれ・ざれ」というラ変型の活用をも伴う。

連体形の「ぬ」は完了の「ぬ」と間違えやすいが、「ず」は未然形に、完了の「ぬ」は連用形に接続すること、前後の文脈をよく考慮して間違えぬようにすることが大切である。

四、む・むず・うず

かゝるをりに詣でむ志を、さりともおぼしなむ^②、必ず仏の御しるしを見む^③。(六〇)

出でむまゝにこの物語見果てむ。(二二)

「む」は①仮想・②推量・③意志を表わす助動詞である。文例の「詣でむ」は「もし参詣するなら」、「出でむ」は「もし退出したら」の意で、ある事がらを仮定し、想像するに用いてあり、「おぼしなむ」は「お思いになるだろう」、「見む」は「見るだろう」と仮定に基く推量の意を表わし、「見果てむ」は「見込そう」という意志を表わす。仮想・推量の「む」は、直叙を避けて物事をほかしているのにも用いられ、それは「腕曲語法」の「む」または「離化法」の「む」ともいわれるが、とにかく「む」は平安文学には極めて多く使用される。「むとす」がつまってきた助動詞に「むず」がある。意味はほとんど「む」と同じで、推量・意志を表わすが、この日記には用いられていない。この「むず」から転訛した「うず」が一個所用いられている。

ぬしたち調度とりおはさうぜよや(六一)

五、まし

その夜この浦を出でさせ給ひて、石津につかせ給へらましかば、やがてこの御舟なごりなくなりなまし。(七三)

「まし」は「もし……なら、……かもしれない(が実際は……でないから、……でない)」というように、事実と反した事がらを仮想し、推量するに用いる。その点が同じ推量の助動詞として「む」と異なる点である。次の例を考えてみよ。

「さめざらましを」といとながめられて（七二）「さめなかつたらよかつたのに、実際は目がさめて残念だ」と……）

いかにいひ何にたとへて語らまし秋の夕べの住吉の浦（七二）（何にたとえて語ろうか、実際何とも言いようがない）

なお助詞「ば」が已然形につくと確定条件を表わすが、「まし」の已然形「ましか」に「ば」がついても確定条件とはならず、仮定条件となることに注意せよ。

六、じ

① まどろまじこよひならではいつか見む……（三）

② 潮満ち来なば、こゝをも過ぎじ（一五）

「じ」は①打消の意志（……まい）推量（……ないと思う）を表わす。だいたい「む」の打消と考えてよい。

七、まほし

いと恋しければ行かまほしく思ふに……（四）

春秋をしらせ給ひけむ事のふしなむいみじう承らまほしき（五八）

いはまほしき事もえいはず、せまほしき事もえせず……（三九）

「まほし」は希望の意味を添えるもので、口語の「……たい、……たいものだ、……たく思う」にあたる。「まく欲し」から変ったものといわれる。

連用形につく助動詞

一、き・けり

渡りし時は水ばかり見えし田どももみな刈り果ててけり。（三五）

苗代の水かげばかり見えし田の刈り果つるまで長居しにけり（三五）